

3 歳児保育における幼稚園と家庭の連携のあり方を考える

——10年間の『連絡ノート』の分析を中心に——

愛知教育大学幼児教育教室 久 世 妙 子
はちまん幼稚園 竹 川 雅 子

Tendency and Changes of the Interaction between a Family and Kindergarten.

——By Analyzing the “Communication Note” of Three Years Classes
for 10 Successive Years (1980—1990)——

Department of Early Childhood Education Taeko KUZE
Hatiman Kindergarten Masako TAKEKAWA

1. はじめに

幼稚園教育要領が改定(1990)された背景に、幼児を取り巻く環境の変化や、人間関係の稀薄化などの社会変化、そこから家庭及び、地域社会の教育力の低下があげられている。また、幼稚園教育においても「幼児にたいする保護者の期待の過熱化と幼稚園経営の困難とが結び付いて、本来の幼稚園教育の在り方からみて適切とはいえない教育がおこなわれている実態」(幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議)が生じ、子どもの発達状況に影響がみられるとしている。

子どもは幼ければ幼いほど大人の保護、養育を必要とする。また、幼児期は未熟で可塑性に富んでいるため、環境からの影響を受けやすい。

多くの可能性を秘めながらも無能の状態で誕生する子どもが、人として自立していく過程では、生活の力や知識、そして自分の選択肢を持って生きることが必要となる。それはまず子どもと共に生活する親をはじめ家族、保育者、友だちなどの人を介するさまざまな援助や働きかけ、また子ども自身の意欲にもとづいた直接経験によって培われる。

しかし、近年では基本的生活習慣の自立ができていない子ども、体を使って遊びこむことができない子ども、さまざまなことに興味や関心を寄せることの少ない子どもなどの問題があがってきている。

また、育児情報はあふれながら、早期教育の過熱化などにより、母親の育児不安も問題とされている。そして、幼児教育において、遊びが大切と理解はしていても、保育者自身が地域で友だちと遊びこんだ経験を持たないで育った世代であり、そのことからくる保育者の資質や教育観の変化についての問題もあるといえよう。

本報では、①子どもが変わったといわれる背景にある、3歳児の最初の環境である家庭や幼稚園の10年間の変化を、家庭と幼稚園で交換された「連絡ノート」によってみる。そして②3歳児をめぐる、親の育児姿勢や保育者の保育姿勢が子どもの生活や発達にどのように影響を及ぼしているか。さらにそこから、③今後の家庭教育と幼稚園教育の望ましい連携のありかたについての方向を探りだすことを目的として研究を進めることとした。

2. 幼稚園教育と家庭教育

1) 幼稚園と家庭の役割

最近見直されつつあるとはいえ、幼児教育といえば、幼稚園、保育所等の施設において行われるものと考えられてきた。24時間の生活の流れからいえば、子どもは家庭生活により依拠しており、生まれ育つ最初の環境として、日常的な生活を営む家庭の影響を幼稚園生活と切り離して捉える事は出来ない。

幼稚園では、保育者・友だちなど人的環境、遊具・教材・施設などの物的環境、そして、遊び・活動・課業などの教育内容を備えた集団教育の場であり、それらの刺激から、人としての身心の発達の基礎を培う役割を持つ。

一方家庭は、日常生活や、家族の愛情を基盤として、生きること、身心の健康をはかる生活を営み、人に信頼をよせ、社会に適応するための、基本的人格形成の基礎を培う役割がある。

2) 園と家庭の連携の意義

①幼児の1日の生活が相互に関連し合うことにより、家庭での経験が園生活で広がり、園で経験したことが、家庭で深まっていき、豊かな生活をつくることができる。そこから園と家庭との協力とそれぞれの役割を認め合いつつ、子どもの望ましい発達を保障することができる。

②家庭の親の子どもへの思いを受け止め、園の教育や生活内容の意義、子どもの様子を伝え合うことで、相互に子育てについての共通理解を持つことができる。

③母親が家の中に閉じこもることなく、同じような子育ての経験を持つ母親とのつながりを持ったり、保育者と相談し合ったりすることで、子育てについて学びあったり、支援しあったりできる。

また保育者も、母親と話し合うことなどを通して、子どもを見る目を変えたり、視野を広げたりすることができ、共に育ち合うことができる。

3) わが国における幼稚園教育と家庭教育

①今日では「母性は本能か」と母性そのものが

問いかけられる時代でもあるが、子どもを産むという事実から、古来、育児は母親の役割という社会的通念がみられた。特に母と子の絆の強さから日本は母性的社会といわれ、また「子宝思想」もある。西欧ではルソー（J.J.Rousseau/1712～1778）により近代的児童観がうちたてられたが、わが国では、儒教思想による大人の生活を中心に据えた身分制度にもとづくものではあったが、家庭を中心に母の膝下で行われ、子どもは教育されねばならない存在として捉えられているのを見ることができる。

②明治維新後、近代教育思想の取り入れにより「学制」がひかれ、幼児教育は「幼稚小学」として公教育に組み込まれ、1876年（明9）には、東京女子師範附属幼稚園が設立された。しかし、幼稚園に入るのは、裕福な階層の子女に限られ一般的には幼児は家庭において、過ごすのが普通であった。幼稚園の目的は、母親に幼児の教育の重要性を自覚させることであり、幼稚園教育とは家庭に代わって教育するものではなく家庭教育を補うものとしての位置づけであった。つまり幼稚園教育は家庭教育を補って完全な基礎教育をしようとするものであり、これは最初にフレーベル（F. Fröbel/1782～1852）の教育思想が取り入れられたことによるものといえる。

③明治30から40年にかけては、幼稚園が普及すれば家庭の教育がおこなわれなくなると、幼稚園不要論がみられる。儒教思想や家父長家族制度の時代にあり幼児は家庭の母親のもとでおこなわれるのが当然であり、幼稚園に通うことは母親の責任を放棄するものと捉えられたのであろう。

しかし、この後、大正期にかけて、新しい児童文化運動がおこり、自由主義にもとづいた、幼児教育が展開して行く。

④倉橋惣三（1882～1955）は明治から大正、昭和にかけて、わが国の幼児教育を公教育に位置づけたが、一貫して「就学前教育の本拠は家庭」「家庭教育の真諦は生活教育」とし、幼稚園教育は家庭教育を補い、身心を充分に発達させ学校教育の基礎を築くための意義を説き、実践している。

倉橋のその教育思想のなかには、今日の教育要領につながる「環境を通しての教育」また環境の

なかに人的環境の重要性ををあげている。

⑤第二次大戦後、教育も大きな転換期を迎えたが幼稚園教育は初等教育として学校教育体系に位置づけられ、内容も整えられ、その門戸も広くひらかれていった。

幼稚園は、家庭を補う役割から抜け出し、「幼児の身心の発達を助長する」（学校教育法）役割を担い、家庭教育とは異なる幼児期独自の重要性が強調された。幼児教育の指針とされた、保育要領（1948）では幼稚園の生活の在り方と同時に家庭での子どもの生活の在り方が詳しくあげられている。

山下俊郎はその著書「家庭教育」において、家庭教育の意義を、日常生活のなかで自然に、また意図的にはたらく教育作用によって、子どもが人格形成をしていくことにおいた。それに対して、家庭教育ではできない、自我と対立する他我の世界の存在を認識させるために、つまり自我形成のために幼稚園教育の必要性もあげている。

⑥経済や社会の変動により、家庭・家族・親子関係をはじめとした環境の変化があり、1956（昭31）及び1964（昭39）の幼稚園教育要領は、教科にあたる領域をおき、間接経験によって知識、技術を指導する教育内容となり、家庭教育とは関連性のほとんどないものとなっていった。

日本の高度経済成長期（1970～）にはいり、高学歴偏重の傾向が教育にも家庭にもさまざまな影響を投げかけはじめ、教育が家庭から離れ、学校・幼稚園へと移行していく傾向がみられはじめる。

⑦80から90年にかけては、「ゆとりある教育」「個性尊重」の教育思潮から、幼稚園教育と家庭教育は相対した関係のものではなく、共痛点を持ちつつ、補い合うものとして捉えられるようになってきている。つまり家庭も幼稚園も共に子どもにとっての発達環境であり、その連携が子どもに大きな影響を与えるものであるとの見直しがされてきたのである。

幼児が環境から影響を受けるだけの存在ではなく、環境に自ら働きかけながら育って行く存在であるという子どもの発達の捉え直しもされてきている。

⑧90年代に入った最近の研究では、子どもの育

ちを軸として、幼稚園と家庭の連携の視点から、親の態度、例えば、従来家庭教育のなかで当然のこととして行なわれてきた基本的生活習慣のしつけを園に期待していることや、知育偏重、早期教育などを求める傾向があげられ、一方、保育者も親の保育参加を子ども理解や保育理解にプラスになると捉える者や単なる「手伝い」と捉えるなど、親と保育者のズレの実状などがあげられている。そして、親を教育に巻き込んで行く、「パートナーシップ」としての連携の在り方などに研究の方向が進められている（日浦直美）。

3. 幼稚園と家庭の連携の在り方 —10年間の「連絡ノート」の分析より—

＜研究方法＞

3歳児からの幼稚園への就園率が増えているが、3歳児は自分の思っていることを言葉で相手に伝えたり、今日、経験したことを話すのはまだ十分ではない。親もわが子の初めての通園にあたっての不安は大きい。保育者もまた、それまで子どもが過ごした家庭や1日の大半を過ごす家庭の生活を踏まえなければ、子どもを理解することができない。そのため、3歳児の家庭での様子や園での様子を綴り、それを交換しあうことで、①子どもの家庭と園での生活を伝え、相互に共通理解を持つ。②子どもの生活、変化を通して幼児期の特性や発達についての視野を広げる。③書くことにより子どもへのかかわり方や言葉がけについて反省したり、意図的に働きかけたりする効果が生ずる。

こうした、意義を連絡ノートにもたせ家庭と園とで交換しあっているH園の「連絡ノート」を資料とし、そこから入園後の1年間の生活の中で、親と保育者がどのように、子どもを理解し働きかけてきたのか読み取り、12項目（24細項目）に分類した。（表1）

この項目の分析結果をまとめ、研究を進めたが、本報で取り上げるのは、1980年と1990年各40名の「連絡ノート」から、①記録回数の比較。②母親の育児姿勢の80年と90年代比較、③保育者の保育姿勢における両年度の比較である。

表1 記述内容の分類項目

A	親の育児姿勢
A 1	育児の喜び, 願い, 悩み, 不安
A 2	親から保育者への相談, 要望
B	家庭生活の様子, 親子の会話
C	生活習慣, 生活リズム, 生活力
D	健康, 障害, 病気, けが, くせ
E	性格, 情緒, 精神的成長, 不安
F	登園の喜び, 不安
G	社会性, 友だち, 遊び, 言語
H	自然, 動植物への興味
I	絵本, 文字, 数字への興味・関心
J	園生活の様子, 会話, 保育内容
K	保育者の保育姿勢
K 1	保育者から親への要望, 助言
K 2	保育の喜び, 反省, 考え
O	その他

4. 結果と考察

1) 記録回数の変化

<記録回数>

記録回数は日付毎に1回とした。1回の記録の量としてはほとんどが1枚分(B 6)である。

1回分の最多記録頁数は親が6頁(1991), 保育者は5頁(1980)であり, 1人分の総頁数で最多者は, 親・保育者をあわせて182頁(1980), 少ないものは23頁(1992)である。

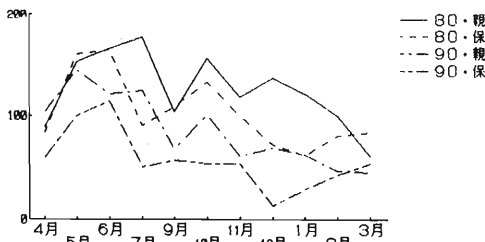


図1 年度別・月別記録回数

<月別記録回数>

80年より90年のほうが, 親・保育者共に記録回数が減っている。また, わが子一人について書く親に対して, クラス15~20名の記録をしなければならない保育者の記録回数は両年代とも少ない。

なかには月に1度も記録されなかったノートもみられた。書く内容, 期日などについては4, 5月は週に1回は交換しているが, 後は両者の自主性, 都合にまかされている。子どもが園生活に慣れるに従い, 減る傾向がみられる。

回数について, 80年は親と保育者が, 対応し合っているのが見られるが, 90年では親と保育者との差が大きい。

90年では, 80年に比べてバス通園者が増えている。園まで, 親が送ってくる徒歩通園者に比べ, 園の様子を目にする機会は少なく, 連絡を取り合う必要性は増えているはずであるが, 近年では, 書く手間をかけるより電話によって連絡を取り合うことが増えている傾向によるものであらうと思われる。

2) 親の育児姿勢の年度比較

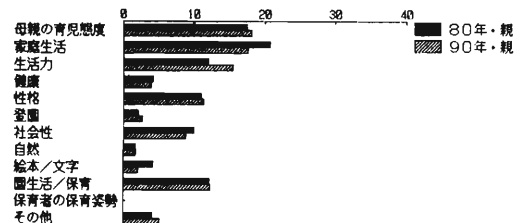


図2 80・90年における親の項目の比較(%)

<80年が多い項目>

80年の方が多い項目をあげると, 家庭生活, 健康, 社会性, 絵本/文字である。

家庭生活の様子を記述からみても, 家族とのかかわり, 会話, 遊びなどが多く見られる。

(例)「夕方, お父さんが帰って来て『Y, 今日泣いたのか?』」(1981・4)「夕ご飯の時, 私が3人の話を聞きながら食べていたのに, 怒りだして……(自分の話を聞いてもらえなく

て)『もう、お母さん、キーライ!』と」(1981・9)「お父さんに手を添えてもらって、こわごわ乗っていた自転車もようやく上手にのれるようになって」(1980・8)「最近、紙で折る財布づくりにこっています……」(1980・2)

と家族団欒の様子が多く見られた。

また、わずかではあるが、健康面に関する項目が90年のほうが減っている。健康についても、アレルギー体質等で悩む子が増えていることなどから、記述のなかで増えているのではないかという予想に反した。このことは記述内容からみると、80年の親は健康に育つことを生活のなかでとらえ、工夫したり改善しようとする姿勢があり、くせについても、やはり何とか矯正しようとする姿勢がみられた。これに対して90年では、アレルギーに悩んでいる親子は多くなっているが、家庭での対応や生活の中での注意では改善しえなくなっており、専門医による治療によっていることが多く、そのため保育者に相談することではなくなっていると思われる。また、くせについても矯正することによる子どものストレスを気にして、自然に直るだろうとか、時期がくればなくなっていくだろうという捉え方の傾向もみられた。

遊びや人との関りなど社会性の項目も90年のほうが減っている。

「夕方になったのに、まだ公園であそんでいます。どうせ泥んこになって帰ってくるでしょうからお風呂を沸かして待つ事にしました。またお風呂で遊んでしまうかもしれません」(1982)と家庭でも友だちをつくって外で遊ぶことを奨励し近所の親同士が連絡をとりあって、公園や庭などで遊ばしている様子が書かれている記述内容が多く、90年では、夕方といえば、テレビの前という姿が浮かび上がって見られた。

絵本や文字、数への興味、関心については90年は80年の半数に減っているのがみられる。このことは、ボランティアの母親の、園文庫への参加が多くなっている90年代が多いだろうという予想に反する傾向であった。この項目は前にあげた、家庭での遊びの様子と関連していると思われる。それは記述のなかに対象的にみられた。

「入園以来、テレビのマンガをみせないかわり

に、8時に床に入り姉とH子に絵本を1冊づつ読んでいます」(1981・6)。「家にあるお気に入りの本と同じ本を……園から借りてきました。……絵本は心を込めて読まなくっちゃ。」(1981・9)「お正月3日間……どこへ行くにも『かるた』持参です」(1980・1)「夕食がすんで、……今日はお兄ちゃんも入って親子3人でピーマンマンごっこをしました。……昨日はトランプでした。『ママ、アブクタッタ、教エテアゲル』とまだいっしょに遊びたい年ですものね」(1981・1)、など。

80年では、絵本を読んでもらったり、かるたで遊んだりといった、家庭の親子の遊びや過ごし方の様子があがっている。それに対して90年では、

「テレビが大好きで、お父さんにビデオを借りてきてもらい何度もみてました。」(1991・5)「今までテレビに子守りをさせていたと改めて反省……」(1992・6)。

そして、テレビは生活の中心にあるだけでなく、子どもの遊びにもその影響がみられた。

「『ジェットマン』のビデオをYちゃんのところへ見せてもらいに行ったりして仲良く遊んでいます」(1991・9)「今、テレビで世界陸上をやっています。『マラソン、ショウ』と2人で走りまわっています。」(1991・10)。

などの記述がみられ家庭での親子の過ごし方の変化が見られた。

<90年が多い項目>

90年に増えている項目は、母親の育児態度、生活力、登園、その他である。

育児態度がわずかに増えているが、これについては後に述べる。家庭生活の様子の記述が80年に多いのに対し、90年は生活力についての記述が多く見られる。生活習慣、生活のリズムなどについての悩みと生活技能獲得などにたいする喜びの記述である。これはより具体的な生活力に関する内容についての関心が増えてきている傾向と見ることができる。

記述内容から見ると、「いつも着替えありがとうございます。トイレトレーニングが遅かったせいか……まだ失敗が多く」「まだ、自分でトイレにいった、出来ず心配です。下の子がいる

こともあります、あまり強くいってもいけないと思いますので、……」(1992・4)など排泄の自立の心配や「お弁当を残さず食べてきた最初の日『お弁当落したの?』と聞いてしまったほど。本当はどうなんでしょう」(1992・5)食の細いことを悩み、園でお弁当をカラにすることが信じられない様子が書かれており、子どもの自立の力が遅れていることもあるが、自立へのしつけないたいし、生活力にたいする悩みや心配の言葉も多くみられ、自立へのしつけないに対する親の意識の変化もみられる。

また、両年の6月におこなっている「生活実態調査」においても子どもの生活そのものが大きく変化しているのを見ることができる。

調査の中から、起床時間と就寝時間の10年の違いを取り上げてみると、起床時間については、半数以上(60%)が6時から7時に起きていたのが、90年では半数近く(46.7%)が7時から8時であり、8時以降(10%)が見られ、明らかに起床時間の遅れがみられる。バスに乗るのは、早い子で8時であり、登園する時間が徒歩の子で9時~9時15分となっているのだから、かなり朝は慌てて支度して登園して来る事になるであろう。また就寝時間の結果では、9時までには84%が眠りについていて80年に比べ90年では、9時までには寝付く子は43%で、9時過ぎが35%、きまっていないが21%である。明らかに夜型となっている子どもの生活が浮かび上がる。きまっていない子の中には11時頃まで起きている事もあるが含まれている。大人の夜型生活時間に子どもも付き合っている様子が浮かび上がる。

登園について増えているのは、明らかに、バス通園が増え、園での子どもの様子を見る機会が少なくなっているため、心配や不安が高いことからきていると考えられる。

その他には、日常の生活と異なる生活体験として、旅行、キャンプ、地域社会との関りをいれたが、90年では、家族旅行などが増えていることが反映しているものと思われる。

<親の育児姿勢の傾向>

親は子どもに対する願いや期待、また悩みや不安、さまざまな思いを持って子育てをして行く。

そうした基本的な親の思いは、10年間でもそれほど差はないとおもわれるが、わずかに90年が高い。月による出現頻度でみると、成長の節目である入園の、4、5月と進級の3月が高い。保育参観、保育懇談、個人懇談のある、5、7、12月も高くなっているのが見られる。

記述内容を見てみると、80年では「最近、家庭教育を幼稚園、小中学校の先生に押し付けている親が多いように感じます。今一度、親自身、家庭教育を考えるべきだと思います」(1981・6)「わが家の家庭教育方針は、思いやりのある子に……」(1981・4)『カブトムシ』がほしいと言いだしました。ストアーへいけば幼虫だって売っていますが、……これは買うものではないと、今度の日曜日に、山に捕りに行くことを約束しました」(1980・7)。

家庭における親自身の考えや、子どもに対しての姿勢が書かれている。

90年では「私も慣れないことばかりで子どもとともに一步一步泣き笑いをともにし(悪く言うといつも重荷を背負っていたと言う印象で)……」(1992・2)「……腹をたてて、いつもひどいことをつい言ってしまう」(1992・5)「もっと遊んであげたい、いっしょに楽しく過ごしたい、これが反省を含めた私の課題です」(1991・1)「弟の世話や家事をしていると、気持ちの余裕がなくなり、つい怒ってしまいあとで反省……」(1992・5)。

子育てに対する不安や、悩みが書かれていたのが特徴的であった。

その一方、90年には、親の劇やコーラスへの参加の機会がある劇遊びの参観のその後の感想に、「子ども以上に楽しませていただきました」(1992・12)

「歌うのは久しぶりでした。とても恥ずかしかったのですが、娘にほめてもらい嬉しかったです」(1992・12)

現代の明るい母親の様子も浮かび上がっている。

3) 保育者の保育姿勢の年度比較

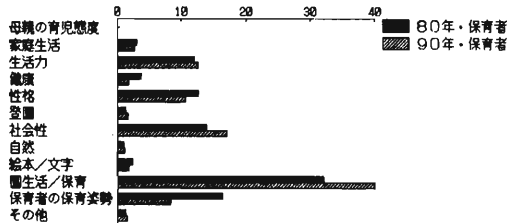


図3 80・90年における保育者の項目の比較 (%)

＜80年が多い項目＞

80年が多い項目は健康、絵本／文字、保育者の保育姿勢がある。

健康に関する項目では、保育者は親の線に添うように上がっていくのがみられ、親と共に健康については高い関心をもっているのがうかがえる。内容を見ると「健康的に暮らすうえで大切なのは、快食、快眠、快便そして遊びによる生活リズムです」(1981・5)「しっかり体を動かし、薄着で過ごせる体力づくりに家でも心掛けましょう」(1980・11)「喘息も、体を鍛えることで乗り越えて行きたいですね」(1980・10)と子どもの健康について積極的に助言したり、指導しているのが見られる。

絵本／文字については、毎日保育の中での読み聞かせが位置づけられており、園文庫からの毎週の貸し出も、保育の中心的な活動として定着しているが、それだけに改めて記述されることがなくなっただけであろうか。親の変化と同じように予想に反することであった。

保育者の保育姿勢については、詳しくは後にみるが、半数近く減っていることに対しては、問題を感じさせる。

＜90年が多い項目＞

これについては生活力、登園、社会性、園生活があがる。

生活力、登園については、親の悩みの増加に対応していると思われる。

社会性に関しては、両年代とも親の記述より保育者のほうが多く書かれている項目でもある。

友達づくり、けんか遊び、言語、社会的行動についての内容であり、これら人との関りや遊びについては、常に保育の大きなテーマとなっていて、常に保育の大きなテーマとなっていることと関係があると考えられる。

全ての項目のなかで最も多いのが、園生活についてである。これは園生活の中での子どもの様子が記述されている。

「縦割りの汽車ごっこで遊んでもらったが、圧倒されたのか、恐くて参加できない……」(1991・4)

「まだ、職員室で過ごしています」(1992・6)

「今日は〇ちゃんと、遊びました」(1991・5)

「砂場が好きで遊んでいます」(1992・5)

保育者としては最も書きやすく、一般的な記述に終わっているあたりは気になるところでもあった。

＜保育姿勢の傾向＞

特に90年の保育者の保育姿勢の項目が80年に比べ、その半数に減っているのがみられる。記録回数とも関連があるが、親からノートを受け取り1ヶ月ほどたってから返しているものも見られ、親の質問、悩みに答えていないものになっていることとあわせて、記述内容のズレとなって現れているのではないと思われる。

80年代の保育者は保育者としての考え、意見をはっきり持ち、助言などしているのがみられる。「……もう少し、鍛えなくては……」(1980・G)、と言うものから「……もっとのんびりと、自然に……」(1981・G)までさまざまではあるが、90年代では、保育者として保育内容・行事・活動についてのねらいや意義などを述べたり伝えたりする項目も減っているのがみられる。保育者の保育観、保育姿勢に関する内容であるだけに、保育者としての資質が問われるところといえるのではないか。

90年では一般的な言い方で記述されており必ずしも、その悩みやその子の場合にあった回答がされていないのも見られる。

80年の保育者は上下しながら対応しているのがみられる。90年の保育者は親の悩みには十分対応しきれていないといえるのではないか。

5. まとめ

バスでの通園者が年を追って多くなっており、園での様子を見たり、担任と顔をあわせる機会も少なくなっていることからすれば、園での子どもの生活を知るためには、もっとノート交換の必要性もふえるはずである。それにもかかわらず、80年に比べ90年は記録が減っている。特に保育者の記述が少なくなったことに、90年の親の記述も対応して減っているのが見られた。これにより親と保育者の関り方も減少してきているといえるが、ノートの意義、教育効果などについての保育者の確認の必要性があるであろう。分析結果から明らかとなった点を以下にまとめてみる。

＜親の変化＞

① 親の全体的な傾向としては、おおむね、両年度の各項目の出現頻度の割合は同じであり、育児姿勢や保育者への要望、相談の項目についても、月による違いは見られるものの同じ様な割合であった。これは親の子どもに対する願いや思いは基本的には、いつもそんなに変わるものではないということでもあろう。

② 90年のノートの中に「イライラしてしまう」「手をあげてしまった」と言う文言で表現されているのが見られた。こうした言葉が交換しあうことを前提としたノートに記述されているということは明らかに、親の育児不安、悩みの訴えの傾向としてとらえねばならないのではないかな。

そしてこのことは、それをフィードバックし、支えることのできる保育者の在り方をも示唆しているものといえよう。

③ 家庭生活の様子、遊び、絵本／文字にかかわる項目が、80年の親のほうに多く見られその中に家庭で子どもに関わり合いながら生活している様子や記述内容にも「家庭教育として……」「しつけは親の責任……」という言葉がみられるように、家庭における教育が熱心におこなわれているのがみられたが、90年にはそれは全く見られなかったのは特徴的であった。家庭環境の変化も大きいが、90年代の親の意識のなかに幼児教育は幼稚園でと捉える傾向があるのではないかと推論される。

④ 家庭での子どもの生活の仕方、過ごし方も大きく変わり、80年では外で遊ぶことを励まし、テレビのかわりに絵本を読み聞かせたり、夕食後、親子で一緒に遊ぶ様子が挙げられているのに対して、90年はテレビ中心の生活が浮かび上がり、今日の家庭生活の有り様を反映しているようである。

また記述のなかに父親の登場の多いのは80年であった、子どもが生活する家庭環境の変化だけでなく、日常的な家庭生活においても、親の意図的、教育的な配慮や努力をするといった姿勢の減少傾向が認められ、親の変化もあきらかとなった。

＜保育者の変化＞

① 90年の1/3を占めていた項目は園生活の様子、保育者と子どもの関りに関するものであった。園での具体的なエピソードに片寄る傾向と言える。

80年の保育者が親に対応して、自分の考えをはっきりと述べているのに対し、90年の保育者は子どもの日々の園生活を伝えるにとどまり、自分自身の保育姿勢、考えを記述することが少なくなっている。こうした傾向は、家庭、親との連携によって子どもの生活、育ちをみていこうとする意識が薄くなったといえるのではないかな。

② 80年と90年の保育者の対比においてその差が顕著であったのは、保育者の保育姿勢、保育者から親への要望、助言に関してであり、80年の保育者には高く見られた。このことは、それまで1冊のノートで連絡しあっていたものから、複写式のノートにするという改善策を提案するなど保育者のなかに、子ども一人ひとりの発達を捉え、記録としたいという意図的なとりくみの姿勢があり、90年では今まで書いていたものであるからと言う受動的な姿勢や意識が強いことによるのではないかな。このことからいえば、ノートがもつ教育的意義についての確認をもって臨む必要性が示唆された。

③ また、90年の親の生活面での悩みに対しての保育者の応答は少なく、4月、3月を除き大きなズレがあった。これに合わせて、保育内容、行事、活動のねらいなどを伝える項目も減少が見られた。また園文庫を持ち、読み聞かせや家庭への

貸出しなどをして、子ども達により豊かな文化との出会いをさせたいとすることがH園のねらいになっているのに、記録回数が減少している。親の育児力を高めて行く啓蒙的な働きかけが必要となってくる。さらに保育者の資質の向上も課題とされねばならないことが明らかとなった。

90年の教育要領の改定以降、幼稚園においても「指導」か「援助」かによる、揺れ動きがみられる。それまでの幼稚園教育が教師主導の教育であったことの批判から、子どもの主体性にもとづきその生活や遊びをみていく姿勢が強調されており、指導と援助のありかたや、一人ひとりに目を合わせて行く保育者の視点のおきかたも変化している。こうした大人の意識の変化、生活環境の変化が子どもの発達や生活に大きな影響をなげかけている。

園と家庭が共に教育機能を高め合って行くことができる応答的な連携のありかたが、今後の幼児教育の大きな課題となるといえよう。

- 4) 東 洋／柏木恵子／R. Dヘス 母親の態度・行動と子どもの知的発達 一日米比較研究― 東京大学出版会 1990
- 5) 倉橋惣三 倉橋惣三選集 第1～4巻 フレーベル館 1990
- 6) 小嶋秀夫責任編集 新・児童心理学講座⑭―発達と社会・文化・歴史 金子書房 1991
- 7) J・ボウルヴィ 母子関係の理論 1 愛着行動 黒田実郎／大羽 岡田洋子／黒田聖一訳 岩崎学術出版社 1991
- 8) 岡本夏木責任編集 新・児童心理学講座⑰―子ども理解の視点と方法 金子書房 1993
- 9) 竹川雅子 3歳児をめぐる親・保育者関係―(連絡ノート)を中心に幼稚園と家庭の連携のあり方をさぐる― 修士論文 愛知教育大学大学院教育学研究科 1994. 3

<引用文献>

- 1) 幼児保育研究会／代表森上史郎編 最新保育資料集 ミネルヴァ書房 1993
- 2) フレーベル会編 復刻版幼児と保育 名著刊行会 1949
- 3) はちまん幼稚園 「今、子どもの生活は、一子ども生活実態調査―」 1983. 6 および1992. 6 調査より
- 4) 日本保育学会 第44, 45, 46回大会 研究論文集 日本保育学会 1991, 1992, 1993

<参考文献>

- 1) 上笙一郎／山崎朋子 日本の幼稚園 理論社 1965
- 2) 日本保育学会 園保育と家庭 ―保育学会年報 1973版 フレーベル館 1973
- 3) 日本保育学会 家庭の養育態度―保育学会年報 1985版 フレーベル館 1985